



## 2006 年 忘年会のご案内

12 月 14 日

京都支部では 2006 年の忘年会を下記のとおり開催します。  
皆さまのご参加をお待ちしております。

日 時： 2006 年 12 月 14 日 (木) 午後 7 時 30 分から

場 所： 喫酒喫菜 えはら

<http://gourmet.yahoo.co.jp/0006718631/WV-KYOTO-4KBES001/>

京都市中京区室町新町の間四条上がる観音堂町 453-1

TEL:075-212-7054

(アクセス) 阪急京都本線烏丸駅 / 地下鉄烏丸線四条駅 徒歩 3 分

申込方法： 次のいずれかでお申込下さい。

1. フォームでのお申込み

京都支部 Web サイトの申込みフォームから

<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

2. メールでのお申込み

(1)お名前、(2)ご所属、(3)メールアドレスをお知らせ下さい。

京都支部 (E-mail: [dtkk@rg7.so-net.ne.jp](mailto:dtkk@rg7.so-net.ne.jp)) まで

3. 電話、FAX でのお申込み

(1)お名前、(2)ご所属、(3)メールアドレスをお知らせ下さい。

赤澤久弥 (滋賀医科大学附属図書館) まで

(連絡先) TEL 077-548-2080 FAX 077-543-9236

### [目 次]

忘年会のご案内	...	1
第 37 回全国大会に参加して	...	2
京都大学図書館機構講演会「目録 / 目録規則の動向と将来像」参加記	...	3

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール : [dtkk@rg7.so-net.ne.jp](mailto:dtkk@rg7.so-net.ne.jp) (大学図書館問題研究会京都支部)

URL : <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

## 第 37 回全国大会に参加して

大綱 浩一

出不精の私にとって遠方へ出かけることは、なかなか骨が折れる行為のため、2000年に地元京都で開催された時に運営をお手伝いして以来、全国大会へは足が遠ざかっていたのですが、今年は思いがけず全国大会へ参加することになりました。

今年の全国大会は8月5日(土)午後から7日(月)午前の3日間にわたり埼玉県浦和市で開催されました。

1日目は会員による研究発表に始まり、小グループに分かれての情報交換(分散会)や会の活動方針、予決算、役員を選出およびその他必要事項を審議し決定する年次総会(全体会)などが行われました。

2日目は午前(1)大学図書館史、(2)学術情報発信/機関リポジトリ、(3)図書館経営、(4)利用者サービス、(5)蔵書構成、(6)ILL、午後(7)危機管理、(8)出版流通、(9)リテラシー(情報リテラシー教育)、(10)著作権、(11)図書館システムに関する課題別分科会と、その他(1)本に関するよもやま話、(2)ILL、(3)図書館システム、(4)電子ジャーナル、(5)危機管理に関する昼食をとりながらの情報交換会(ラウンドテーブル)が行われました。

そして3日目は(1)人文系、(2)社会系、(3)理工系、(4)生物・医学系、(5)教育系の課題別分科会が行われました。

このうち、私は2日目の課題別分科会(6)ILLとラウンドテーブル(2)ILLに参加し、課題別分科会で国際的なILL/Document Deliveryの仕組みづくりを目指しているGIF(Global ILL Framework)について報告を行いました。(この報告を行うため、思いがけず参加することになった訳です。)相互利用を始め、図書館活動に色々に関心は持ちつつも、日頃は業務に追われ、つつい断片的、目先の理解に止まりがちなのですが、今回、報告の機会を得ることができて、復習し、資料を作成し、報告する中で、私自身、改めてGIFについて客観的、全体的に理解することができたと思います。こういった機会がなければ、なかなか俯瞰的に理解することもままならないため、とてもいい機会だったと思います。

さて来年の全国大会は兵庫県で開催されます。割と近場での開催となります。ご予定を空けておかれてみてはいかがでしょうか。

おおつな こういち(京都大学附属図書館)

---

---

## 京都大学図書館機構講演会「目録／目録規則の動向と将来像」参加記

進藤 達郎

---

---

10月10日に京都大学附属図書館で開催された、京都大学図書館機構平成18年度第1回講演会に出席してきた。帝塚山学院大学の渡邊隆弘氏による「目録／目録規則の動向と将来像」と題されたこの講演会には、京都大学内だけでなく近隣の大学図書館からも多数の出席者が集まっており、この講演に対する関心の高さを垣間見る思いだった。2時間弱にわたった興味深い講演内容について、簡単なが以下にその概要を報告させていただきたいと思う。

近年、特に米国では図書館目録の現状に対する危機意識から、目録の将来像に関する議論が活発となっている。また、目録規則を新たな枠組みで捉えなおすべく、新しい国際目録原則の策定が進められている。これらの現象は、インターネットをはじめとした情報技術の進展によって、目録対象資料と情報組織化環境の両者に変化がもたらされ、図書館における目録作成上の不具合が大きくなったことから引き起こされたものである。

現在の目録への危機意識と将来像を探る議論は、2005年1月に行われた、LC副館長 Deanna Marcum による“The Future of Cataloging”(目録業務の将来)と題された講演以降活発となった。この講演では目録作成にかかるコストの増大、インターネット検索の普及と大規模なデジタル化プロジェクトの進展による目録利用の低下といった問題について、抜本的な見直しの必要性を問いつけるものであった。そして、それに答えるようにカリフォルニア大学、インディアナ大学、米国議会図書館などから文書が発表されている。これらの議論では、上記の問題点を踏まえて現代の図書館目録の方向性が模索されており、その中からインターネット時代の図書館目録として備えるべき機能と、よりオープンな図書館目録像が提示されている。

これらの議論の中で特に注目を集めているのは、コーネル大学図書館の Karen Calhoun が LC の委託を受けて執筆したレポートを巡る議論である。Calhoun が悲観度の高い現状認識と企業経営理論の図書館目録への適用によって、コスト削減と図書館目録の簡素化に重心を置いた提言には、研究図書館員としての視点から強い批判も寄せられている。たとえばいち早く Calhoun のレポートに反駁する論文を発表した LC の Thomas Mann は、研究者と一般利用者の目録利用における違いを強調し、Calhoun の提言は研究図書館の利用者にとっては有益ではないという論を展開している。

このような議論が行われる中で、Google ライクな検索結果のランキング機能や Amazon に見られる他のレコードとの関連付けなどといった、新しい機能を持った図書館目録の構築が求められるようになってきている。しかしながら、特に日本では目録システムの諸機能はベンダーから提供される図書館システムの統合パッケージに依存しており、必要に応じて改修を加えることが難しくなっている。新しい図書館目録像を実際に出現させるには、統合パッケージから自律した目録・検索モジュールを、必要に応じて自由に手を加えることが出来るオープンなシステムとして作成する必要があると思われる。

ここ10年ほどの間に、目録規則はかなり手直しが加えられてきた。従来の目録の枠組みは、1961年のパリ原則と1969年以降整備が進められてきた ISBD 各種に基づいた、AACR 及び NCR で構成されている。しかしながら、目録対象資料と目録業務を取り巻く環境の双方に電子化の波が押し寄せ

た結果、その枠組みでは対応が困難になりつつある。これに対応するために、1997年のFRBR以降、目録のモデリングとその実用化を目指した新しい枠組みによる目録規則の策定が進められている。

この新しい枠組みの重要な点として、目録対象資料の内容的側面(コンテンツ)と物理的側面(キャリア)を分離して取り扱うことや、発達する情報環境を念頭に置いた、目録記述へのアクセスポイントの見直しなどが挙げられる。国際的な動向としては、パリ原則に代わる目録の基本原則の制定を目指して、IFLAによる国際目録原則の策定作業が進められており、2008年には完成する予定である。また、AACRの全面的な改訂も2002年から始まっており、紆余曲折を経ながら、現在はResource Description and Access (RDA)という名称で草案の改訂が進行中である。

この講演では、情報化が進む環境の下で図書館目録はどうなっていくのかという問題について、OPACを中心とした目録システムと、目録を作成するための目録規則の2つの側面から解説された。それぞれに興味深い話題だが、個人的に面白かったのは時代の変化に対応した新しいOPACについての話だった。

OPACを図書館システムから独立したモジュールとして運用されている例として、講演中にノースカロライナ州立大学(NSCU)のOPACが挙げられていた。NSCUのOPACでは、検索結果を請求記号やトピックなどで絞り込んだり、現在貸出可能な資料だけをリストアップしたりできる。これらの機能は以前からOPACがあれば便利だと考えられていた機能であり、図書館以外のウェブサービスではよく見かけるものである。これがOPACでなかなか実現しない理由はいくつかあるだろうが、中でも講演でも指摘のあった、OPACなど目録システムがベンダー提供の統合図書館システムに組み込まれていて、あらかじめ提供されるもの以外の機能やインターフェースを新たに装備することが難しいという点は大きいように思う。図書館それぞれが導入しているシステムに改修の要望を出しても十分な対応が期待できるとは限らないし、それぞれ個別に開発しては効率も悪い。日本でも、標準的なOPACモジュールを図書館システムから独立した形で作成する時期に来ているのではないかという渡邊氏の意見に深い同意を覚えた講演だった。

しんとう たつろう (滋賀大学附属図書館教育学部分館)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員みなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2006年度(大図研会計年度2006.07 - 2007.06)に入っておりますので、2006年度の会費の納入をお願い致します。また、2005年度以前の会費をお納めいただいていない会員みなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

**会費は、¥7,000 (大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000) です。**

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp)、または支部委員(組織・財政担当)の大綱浩一  
までお問い合わせください。